

令和7年度 学校評価報告書

学校名	三田市立上野台中学校
-----	------------

1 学校教育目標

「夢や目標を探求し、確かな学力と豊かな心でたくましく生き抜く生徒の育成」

2 今年度の学校重点目標

- (1)「学力」の向上に向けた授業改善の工夫（充実した授業、質の高い授業）
- (2)「対人関係能力」の育成（人権尊重、生徒指導、開かれた学校）
- (3)職場環境の整備 [生徒に向き合う時間の確保]
(協働して支え合う<<チーム上野台>>、勤務時間の適正化)

3 総合的な自己評価

小規模校の強みを生かした学校運営について一定の成果があった。異学年交流でコミュニケーション能力の育成を図り、令和型行事の推進によって、生徒の負担軽減と達成感を醸成し、目的に向けての手段がある程度奏功した。家庭学習の確立は数年来の課題であり、小中連携、家庭との連携を強化することで、今後の改善につなげたい。昨年度下だった「誰に対しても挨拶ができる生徒」について、保護者から 85%の肯定的評価をいただけたことはうれしいことである。

4 総合的な学校関係者評価

学校の課題を職員で共有し、様々な取り組みをしていることを評価する。昨年度に比べて総合的に評価できる。部活動が地域へ移行し、放課後の生徒への対応が増えると思われるが、バス利用生徒が多いので、居場所作りについて地域との連携が不可欠。

5 評価結果

自己評価				学校関係者評価
分野・領域	評価項目(取組内容)	評価結果及び分析	改善の方策	学校関係者評価委員会の意見
教育課程 学習指導	基礎基本の定着と、ひとり一人が「確かな学力」を身に着けるための「分かる授業」「楽しい授業」「伸びる授業」の創造	アンケートで「授業が分かりやすい」について、保護者の肯定的評価が 83%に下がり、学校の「学力向上への取り組み」に対する肯定的評価も 69%に下がった。	教科の枠を超えた「分かる授業」に向けての研修を推進し、家庭学習の確立と合わせて、来年度の重要課題として取り組む。手段としての ICT 機器の活用も組織的に取り組む。	・宿題の出し方に工夫必要。 ・入学時から卒業後の進路をイメージさせるのが大切。 ・家庭学習は保護者の協力と学校との連携が不可欠。
	GIGAスクール構想によるICTを活用した効率的・効果的な学習指導の実践、及びその共有	研究推進担当が中心となって ICT 機器の活用が進められた。この点について教職員の自己評価も肯定的評価が 100%であった。	更なる効果的活用を目指して、他校の取り組みも参照しつつ、生徒の声も聞きながら推進に努める。	・ICT機器の有効活用は必要だが、従来の「読み」「書き」学習も継続してほしい。
生徒指導 いじめ防止	教育相談等の充実を図り、多様性を尊重した共感的生徒理解に基づく生徒指導や特別支援教育の視点を持った支援	生徒指導委員会を中心に組織的に対応したが、子どもサポーターの有効な活用に課題が残る。	サポートルーム及び子どもサポーターや SC,SSW の存在について、生徒、保護者への広報を強化する。	・保護者の子どもへの関わり方を学校と共有してほしい。
	本校「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめ問題に対して迅速かつ組織的な対応	未然防止、早期対応に取り組んだが、数件、対応が長期化した事案があった。いじめ見逃しゼロについては組織的に意識高く取り組めた。	日頃から生徒同士、生徒と教職員、保護者と教職員の人間関係構築のための「仕掛け」作りを計画する。生徒同士であれば「異学年交流」や道徳、保護者との関係であれば各学校行事や懇談会などで内容を工夫し「対話」の機会を多く作りたい。	・いじめの形態が変わっていつている(水面下での事案)ことへの注視が必要。
保護者、地域住民 等との連携	中学校区のめざす子ども像を共有し、『みんなで育てよう』を活用した魅力ある教育環境づくり	夏季合同研修はじめ、小中連携は進んだ。中学校において義務教育 9 年間で意識した取り組みが、生徒指導中心に進められた。	連携推進のため、小中学校間での互見参観授業を計画している。その他にも職員間の理解と研鑽を深める機会を作りたい。	・小規模校 5 校で取り組んでいる小中連携を更に推進してほしい。
	学校から積極的に情報を発信し連携を深め、地域の教育力を活用した「ふるさと三田」を意識した教育環境づくり	校区にある食品会社の方による講演会が実現した。「虹プロジェクト」が 11 年目を迎えられた。	下校ボランティアやがんばりタイムの充実に加え、PTA に代わる保護者参画組織の模索検討を進める。	・地域の人たちと顔が見える場所づくりを求める。
研修・資質向上	教職員一人ひとりが実践的指導力の向上を図れるように、学習指導の工夫や授業改善を意識した研修体制の充実	各委員会などの会議を教職員の異世代間研修の一環として取り組んだ。道徳研修の継続、公開授業、指導と評価の一体化についての研修に取り組んだ。	生徒が分かる喜びを感じられる授業力の向上を推進する。共感的生徒理解を柱に、SC や SSW の職員研修も計画する。「心のアンケート」の内容も工夫し、生徒の気持ちに寄り添える学校づくりを推進する。	・ICT 機器活用の推進と共に SNS 利用についても検討すべき。
	業務改善を推進しつつ、教科指導や生徒指導、人権教育や安全教育等の領域で地域や家庭に信頼される学校づくり	超勤時間が減少しているが、転勤者にとって新しい分掌を兼任する年度初めの業務が負担となり、引継ぎの合理化が必要である。	勤務時間の適正化と学校行事含む教育活動の充実の両立を目指す。引き続き定例の委員会や校務分掌検討委員会で、現状の教育活動を見直す習慣づけを行う。	・教員数が減少しているにもかかわらず目標をクリアしていることを評価している。